

見逃し症例から学ぶ

神経症状の“診”極めかた

平山幹生【著】

評者

玉岡 晃

筑波大学教授・神経内科学／筑波大学附属病院副病院長

2015（平成27）年11月末に開催された第33回日本神経治療学会総会（会長：祖父江元・名古屋大学教授）において、「症例から学ぶ」というユニークなセッション（座長：鈴木正彦・東京慈恵会医科大学准教授）に参加した。「神経内科診療のピットフォール：誤診症例から学ぶ」という副題がついており、春日井市総合保健医療センターの平山幹生先生（以下、著者）が演者であった。

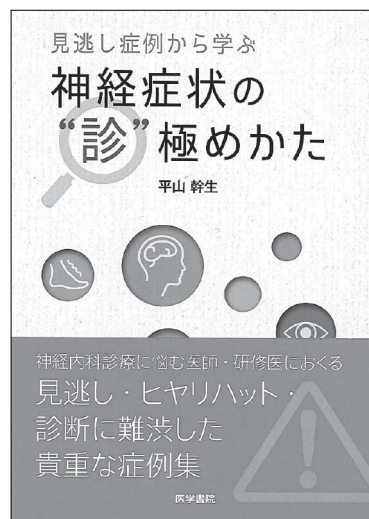
臨床医学のみならず基礎医学にも通じた該博な知識の持ち主でいらっしゃる著者が、どのような症例提示をされるか、興味津々であったが、予想に違わず、その内容は大変示唆に富む教育的なものであった。自ら経験された診断エラーや診断遅延の症例を紹介し、その要因を分析し、対策についても述べられた。講演の最後に紹介されたのが、この『見逃し症例から学ぶ 神経症状の“診”極めかた』であり、講演で提示された症例も含めた、教訓に富む症例の集大成らしい、ということで、早速入手し、じっくりと味わうように通読した。

本書は、約40年間にわたる著者の臨床経験の中から、見逃し症

例やヒヤリハット症例または診断・治療に難渋した症例を提示し、適正な診療の一助となるべく、その教訓となる点を明示した、気鋭の書である。著者は、医学書院刊の『見逃し症例から学ぶ 日常診療のピットフォール』（生坂政臣著）に感銘を受け、その神経内科版をめざして本書を企画し、神経内科診療に特化したM&Mカンファレンスの体裁を採っている。

その構成は極めてユニークであり、意識障害や頭痛、めまいなど、日常臨床で遭遇する頻度の高い症候で章立てされ、章別に分類された症例提示の後、初期診断から最終診断に至る経過の解説があり、問題点から抽出された教訓や過失の解析まで明確にしておき、読者の印象に残るように工夫されている。文献も学術誌の症例報告並みに詳しく的確であり、重要なものには解説まで付けられている。各提示症例の空きスペースには、認知エラーを導く認知反応傾向や認知バイアスの矯正方略が紹介されており、神経内科医のみならず、臨床各科の医師に有益な内容となっている。

本文以外にも、巻頭の「神経内科診療の達人をめざすには」では、



著者の長年にわたる臨床経験から絞り出された珠玉のようなエッセンスが盛り込まれており、神経内科医にとっての貴重な指針となっている。また、「誤診（診断エラー）の原因と対策」では、無過失エラー、システム関連エラー、認知エラーの内容の解説とともに、誤診に至るピットフォールと是正対策も示されており、神経内科医のみならず臨床医全てが知っておくべき、臨床推論の基本が示されている。

以上のように、本書は全編を通じて、著者の臨床経験から滲み出た clinical pearls がちりばめられており、読者は提示症例を追体験し、自らの臨床推論を試みながら、主な神経疾患の診断時に陥る可能性のあるピットフォールを学べるようになっている。神経内科の臨床に携わる全ての医師必読の書であると言っても過言ではないだろう。

A5・頁284 2015年11月
定価：本体4,200円＋税
[ISBN978-4-260-02415-0]
医学書院刊